薬の安全をめざして

堀里子准教授

Interview

“薬は発売された段階では完成品でない”ことを皆さんはご存じでしょうか？
薬は育てるもの・・・より安全な薬に育てていくために、
堀先生のご研究がどのように関わっているのかお話しいただきました。
優しく柔らかな語り口の中に力強さを感じるインタビューでした。

■医薬品情報学とはどのような学問でしょうか …

私たち医薬品情報学の講座では、市販後の薬の適正使用とリスクマネジメント、そして育薬の推進に焦点をあてた研究を進めています。薬は世に送り出された段階では、限られた人数の患者さんで有効性・安全性が認められたにすぎず、薬の情報は十分とはいえません。そのため、多くの患者さんに使われ始めてから創薬段階では見つからなかった新しいエビデンス、副作用、薬物相互作用、個人差、使用上の注意などさまざまな問題点が出てきます。これらの問題点を速やかに捉え、解析・評価をして新しい情報を作り、その中でまた薬を正しく使っていく…この繰り返しによって薬を育てていくことが大切です。このサイクルをうまく回すために、医療従事者や患者さんが捉えている問題点やニーズの情報を効率的に掘り起こす仕組みづくりや、薬の新しい副作用・相互作用・個人差のメカニズム解析とリスク評価を主な研究テーマにしています。

■情報の掘り起こしはどのようにするのでしょう…

全国の薬剤師向けにインターネットを介した情報交換・研修のためのサイトを作り、現場で起こったミスやトラブル事例を収集し、それらに解析を加えた研修用事例を共有するという活動を長年進めてきました（現在の登録者は15,000名）。その後、医師向け、OTC薬を扱う登録販売者向けのサイト、最近では患者・一般市民向けのサイト（みんくす）も構築・展開しています。これまでは、医療従事者からの事例収集が中心でしたが、服薬にまつわる情報については一番に気づくのは患者さん自身ですので、今後は患者さんが薬について学んだり、薬にまつわる情報を積極的に発信できる場を作っていきたいと思っています。今後、これらのサイトに集まってきた情報を医療者・患者のニーズにあった形で各々にフィードバックすることで、互いに得にくい薬の情報を補完し合うこともでき、薬の適正使用の推進にいかせると考えています。

みんくす：www.ikuyaku-ut.jp/minkusu/

■ご研究を一つご紹介いただけますか…

妊娠期の薬の選択や投与設計のための安全性情報は重要です。私たちは薬物動態学の研究手法を使って、薬の胎児毒性・胎児移行性の定量予測に関する研究をおこなっています。薬物動態学は体の中での薬の動きを細かく解析する学問です。胎盤はお腹の中で母親と胎児をつないで栄養を届けていますが、母親が薬を飲むと、薬も胎盤を通って胎児に移行してしまいます。例えば、妊娠末期の痛み止め使用は胎児動脈管収縮の副作用を生じ、新生児肺高血圧症の原因にもなります。胎盤の通過しやすさは薬物ごとに異なりますが、妊婦さん に薬を飲んでもらう臨床試験はできませ ん。そこで、私たちは娩出された胎盤に薬液を灌流し、母体-胎児間の薬物透過の時間推移を測定する実験と薬物動態学/薬力学数理モデル解析を組み合わせることで、胎児毒性を定量予測する評価系を開発しました。また、予測精度を高めるための症例を大規模に収集したり、開発した予測システムの医療現場における有用性の検証をおこなう際には、先にご紹介した医師・薬剤師のサイトを活用しています。

■学環ならではのご研究はありますか…

坂村先生、越塚先生との共同研究で、電子お薬手帳を開発し、ユビキタスコンピューティングの技術を使って、自宅などで正しく安全に薬を使う環境を作る研究をしています。自分の服用薬や体質・嗜好品などの情報を電子お薬手帳に入れておき、処方薬や市販薬、健康食品などを自宅で使うときに、薬などにつけた電子タグをピッと読ませることで、薬の飲み合わせ・アレルギーなどの問題がないかを自動的にチェックできる仕組みです。今のお薬手帳は、病院にかかったときに、医師や薬剤師に見せてチェックしてもらう、医療者間の情報共有のためのツールという意味合いが強いですが、もっと患者さん主体で利用できるものにしたいですね。自宅にいて薬との相性を確認でき、危険な場合には医療機関を受診するようアラートが出たり、適切なタイミングで服薬支援が受けられる電子手帳です。医師・薬剤師は患者さんの自宅での服薬ミスやトラブルに後で気づくのが現状です。最近では、優れた新薬の開発により、入院でなく外来通院で病気が治療できるケースも多くなりました。その反面、ハイリスク薬を在宅で取り扱うこともますます増えていますので、こうしたツールの重要性は高まっていると思います。

gakkan@post311

情報学環国際シンポジウム @ Todai Forum 2011 Paris / Lyon

日本のメディア文化：カタストロフィとメディア

10月22日、情報学環主催の国際シンポジウムがフランス・リヨンのヴィラ・ジレにて開催された。現代日本のメディア文化批判を通して、カタストロフィを動的に思考しうる「知」を探る試みである。

まず、石田英敬学環長が様々なメディアによるカタストロフィの表象を分析し、日本の地理的・歴史的状況と記憶の関係を読み解いた。続いて、ベルナール・スティグレール氏が人間の意識を構成するテクノロジーの危機＝毒化を論じ、ロバン・ルヌッチ氏がアマチュアによる文化実践の必要性を説いた。また、藤幡正樹氏が不確定な世界を理解する方法としてのメディアアートの重要性を指摘、吉見俊哉氏は戦後日本の原子力の推進政策とアメリカの関係を分析した。その後、諏訪敦彦氏の映画上映をはさんで、活発な討議が行われた。

本シンポジウムではインターネットライブ中継も実施した。国内外からツイッターを利用した質疑応答も試みられ、国際的な批評空間を構築できた。（特任研究員・中路武士）

原子力発電と安全神話—原発PR映画を見る

10月30日、記録映画アーカイブ・プロジェクトの第7回ワークショップ「原子力発電と安全神話—原発PR映画を見る」が福武ホールで開催された。前半では「東海発電所の建設記録」（1966年）、「原子力発電所と地震」（1975年）、「海岸線に立つ日本の原子力発電所」（1987年）の3本に加えて、当時の福島第一原発を取材し、警鐘を鳴らしたテレビ番組「いま原子力発電は…」（1976年）が参考上映された。後半では、「いま…」を演出した羽田澄子氏と、出演した物理学者の藤本陽一氏による35年ぶりの対談が行われ、羽田氏は「原発関係者は原子力の安全性ばかりを語るので、それで逆に嘘だと思った」と当時を振り返った。その後、活発な意見交換も行われ、満員の会場からは「原発を通じて国の世論操作の怖さをあらためて思い知らされた」「まさに生き証人といえるお二方を迎え、そのお話を聞きながら映画を考えることができ、貴重な体験ができた」といった感想が寄せられた。（丹羽研M1・瀬尾華子）

壁を越える：万里の長城での日中大学院生対話

万里の長城ゲストハウスにて

11月2日～5日、「壁を越える：万里の長城での日中大学院生対話」ワークショップが万里の長城にある中国清華大学ゲストハウスで開催された。本イベントは情報学環・学際情報学府と清華大学新聞与伝播学院の連携に基づき、国際交流基金と清華大学・朝日新聞社の共同プロジェクトからの助成を受けて、実現したものである。

情報学環の吉見俊哉教授、清華大学の崔保国教授他多数の教員、朝日新聞社の西村陽一氏、そして両大学からそれぞれ二十名近くの大学院生が参加した。ワークショップでは、「科学技術とメディアの危機」「コミュニケーションとパブリック」「産業と市民社会」「ヴィジュアルイメージと文化」の四つのテーマで研究発表が行われた。日中の大学院生は「壁を越える」の主題で熱い議論を交わし、交流を深めた。共に万里の長城に登り、人類最大の「壁」を体感したのも大きな収穫になった。（吉見研M1・張予思）

日韓シンポジウム in 山中寮

毎年恒例の日韓国際シンポジウムが11月10日と11日、東京大学山中寮内藤セミナーハウスで開催された。情報学環とソウル大学が共催するこのシンポジウムは、両校の研究者たちによる研究成果の発表を通じて、研究関心を共有・交流する機会を拡大する場になっている。今年は「東アジアにおけるグローバル・コミュニケーションの新たな風景：ソーシャル・ネットワーク、メディア大衆文化、ジャーナリズム」と題して、日・韓・米・フィンランドの4カ国から総勢31人の研究者が参加し、幅広いテーマにわたる発表及び討論が行われた。情報学環からは石田学環長、吉見教授、林教授、カーリン准教授、松前助教、金助教の教員6人と院生10人が参加した。特に、合宿形式で開催されたため、セミナールームの外でも意見交換や交流がより活発となり、富士山の絶景を背景にリフレッシュしながら学術的な成果を交換し親睦を図る有益な場となった。（林研D1・郭善英）

Congratulations

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

文化庁 文化記録映画優秀賞

映画「夢と憂鬱～吉野馨治と岩波映画」が、平成23年度文化庁映画賞の文化記録映画優秀賞を受賞した。この映画は、情報学環を拠点に、東京芸術大学、国立近代美術館フィルムセンター、記録映画保存センターで進めている「記録映画アーカイブ・プロジェクト」の一環として制作され、公開された。岩波映画の歩みと創設者吉野馨治の半生を、多くの資料映像と関係者の証言から描きだしている。受賞の理由として、記録映画資料の活用が高く評価され、「現代史の一側面を描き出した」と賞賛された。この受賞を記念して、10月23日、第24回東京国際映画祭（文化庁映画週間）にて特別上映が行われた。（丹羽研D1・松山秀明）

毎日出版文化賞

お祝に駆け付けた学府の仲間たちと一緒に・・・

開沼博(吉見研・D1)が、『「フクシマ」論』により、11月28日、第65回毎日出版文化賞人文・社会部門を受賞。福島第一原発と周辺地域の関係から、中心／周縁、加害／被害の多層性、戦後社会のメカニズムを描き、事故前に完成した修士論文を再録したもの。受賞によせて、氏からコメントをいただいた。

入学してすぐ、M1全員で修論の計画をポスター発表する機会があった。マスメディア、インターネット、アート… 「情報学環らしい」華やかなテーマが並ぶ中、「原発と戦後」というテーマはあまりに地味で、場違い感すらあった。結局修士論文を書き終わるまでその感覚から抜け出すことはなかったが、それでも、自分自身をとらえて離さない問題意識を追及し、一定の形にできたことへの満足感はあった。原発事故の後もその問題意識は変わっていない。これからもアウトサイダーであることを恐れず、一方で自分の問題意識から逃げることなく、新たな研究を続けていきたいと思う。

「地方の時代」映像祭映像コンクール 奨励賞

2011年度「映像ジャーナリズム実習」で学生たちが制作したドキュメンタリーが、第31回「地方の時代」映像祭（11月19日～25日／主催：日本民間放送連盟、日本放送協会ほか）の映像コンクール（市民・自治体・学生部門）で奨励賞を受賞した。受賞作品は「震災シューカツ3.11—とある就活生の場合—」。震災直後の不安定な日々の中で就職活動を続ける一人の大学生の姿を等身大の目線で捉えた作品。制作したのは、教育部の菰田奈菜子、並河洸、渡邊翔、学際情報学府の揚俊太郎の4人。「地方の時代」映像祭は、毎年全国の放送局、自治体、市民から意欲的な映像作品が集まることで知られている。（丹羽研M1・伊東秀爾）

日本医学哲学・倫理学会 学会賞

金森修教授が著書『〈生政治〉の哲学』（ミネルヴァ書房、2010）によって、11月6日、日本医学哲学・倫理学会 学会賞を受賞。本書では、フーコー、アレント、ネグリ、アガンベンを中心に、生政治・生権力という新しい概念がどのように使用され展開していったのか、その軌跡が周到に追跡されている。受賞について著者は、「自身の学問的履歴にとって最も相応しい学会からの賞である」と述べるのと同時に、本書を「内部に亀裂を抱えた本である」とも評し、本誌に次のコメントを寄せられた。

それら思想家たちの発想の根底に、〈自然そのものからは離れた存在としての人間〉という人間観を感じ取り、それを一言で〈反自然主義〉と規定しておいた。どのような意味で反自然主義的なのかを私なりに書こうと思ったが、それは事実上、ほんのとっかかりを提示しえたにすぎなかった。生政治・生権力の概念史と、反自然主義とでは、視座の地平や射程がかなり異なるので、この本は裂け目を抱えたままのものになった。反自然主義のより説得的で、より十全な展開は、今後の私に残された課題である。

日本社会情報学会 学会賞

成原慧(山口研・D3)が、9月10日、「著作物の技術的保護のための法的規制と表現の自由」により、日本社会情報学会（JSIS）から2011年度の学会賞(選考委員長　西垣通)を受賞。著作物の技術的保護に関する法的規制が表現の自由にもたらす影響という重要な問題を扱ったものであり、先行する諸業績の検討を踏まえ、明快かつ的確に論点をまとめて自説を展開しており、完成度の高い論文であると評価された。

電子情報通信学会 MVE賞＆ヒューマンコミュニケーション賞

「ソラ・カラ ～ 太陽光を活用した発色による空間演出」により、橋田朋子(苗村研・特任研究員)が、10月13日に電子情報通信学会MVE賞を、また12月7日に電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション賞を受賞。太陽光に含まれる紫外光・可視光の両方とフォトクロミック材料を活用して、発色により空間を演出する仕組みを開発した。コンセプトの提案、光学設計、ミニチュアサイズで実装した結果を詳細に報告した。

電子情報通信学会 学生奨励賞

「口コミに含まれるオノマトペを用いた食品嗜好性検索システムへの応用」により、加藤亜由美(森研・M1)が、11月7日～11月8日にかけて大阪大学中之島センターで行われた電子情報通信学会第21回ウェブインテリジェンスとインタラクション研究会(WI2研究会)において、学生奨励賞を受賞した。擬音語や擬態語が、食品の微妙なニュアンスを伝えることができることに着目し、ネットの口コミ情報からオノマトペを自動で抽出する方法を提案、評価を行った。

現代韓国研究センター 駒場支所開設記念 講演会・シンポジウム

10月12日、駒場キャンパス学際交流ホールで、情報学環現代韓国研究センター駒場支所の開設を記念して、講演会とシンポジウムが約50名の参加者を得て開催された。

姜尚中センター長による「現代韓国研究センターのねらいと駒場支所に対する期待」という講演に引き続き、木宮正史副センター長兼駒場支所長を含め計7名による「駒場における韓国朝鮮研究：現状とその可能性」というシンポジウムが開催された。

シンポジウムでは、駒場キャンパスにいる現代韓国に関連した多彩な分野の研究者が一堂に会して、今後、駒場支所を中心として計画される現代韓国と関わる研究教育に関する取り組みについて議論した。（特任助教・金伯柱）

【gakkan@post311】 情報学環ホームカミングデー

10月29日、恒例の情報学環ホームカミングデーが福武ホールにおいて開催された。まず【gakkan@post311】という年間テーマのもとで、目黒公郎教授（都市防災マネジメント）による「災害レジリエンスの高い社会の実現を目指して」、山本博文教授（日本近世史）による「江戸時代の大震災と日本人」という講演があった。工学と歴史学とまったくちがう分野にもかかわらず、その主旨は見事に結びついていて、約80名の同窓生、教職員一同、大いに学び、楽しむことができた。その後、気のおけない雰囲気のパーティが開催され、新聞研究所、社会情報研究所以来の教育部研究生、大学院生など、多様な同窓生と教職員の語らいはつきなかった。（企画広報委員長・水越伸）

知の遺産の継承を考える

11月26日、福武ホールにてシンポジウム「研究者資料のアーカイブズ—知の遺産　その継承に向けて—」が開催された。本シンポジウムは情報学環附属社会情報研究資料センターが行ってきた高度アーカイブ化事業の集大成として、当センターが行ってきたアーカイブ活動だけではなく、アート・ドキュメンテーション学会との共催ということもあり、幅広い研究者資料群のアーカイブ活動に関する報告が行われた。250名以上を数える参加者に恵まれたことからも、研究者資料のアーカイブズを体系的に考えていくことは大いに着目すべき論点であり、会場からも今回だけで終わらせずに継続的に考えていく必要が指摘された。（特任研究員・玉井建也）

手がかりは デジタル・ヒューマニティーズ

11月29日、福武ホールにて、情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構と文学部次世代人文学開発センター主催によるシンポジウム「デジタル化時代における知識基盤の構築と人文学の役割—デジタル・ヒューマニティーズを手がかりとして—」が開催された。人文社会系研究科下田正弘教授による司会の下、国立国会図書館の長尾真館長、国立情報学研究所の武田英明教授らにより日本のデジタル知識基盤への取り組みが紹介され、グラスゴー大学のMichael Moss教授らによる英国での人文学デジタル化の取り組みが紹介された後、イリノイ大学図書館情報学研究科長のJohn Unsworth教授による、デジタル・ヒューマニティーズに関わる講演が行われた。総合討論では情報学環吉見俊哉教授によるコメントの後、デジタル知識基盤の様々な側面についての議論が行われた。（特任准教授・永崎研宣）

3/10〜11「MELL EXPO 2012」 開催のお知らせ

「メル・プラッツ」は2007年度から5年と期限を決め、メディア表現とリテラシーの「広場」として活動してきました。シンポジウム「MELL EXPO」はこれが最後。5年間の集大成と次の活動ビジョンを議論する場を設けます。ふるってご参加ください。詳しくはWebページをクリック！（教授・水越伸）

日時：2012年3月10・11日（土・日）
会場：東京大学 弥生講堂一条ホール
http://www.mellplatz.net/

編集後記

このニューズレターはコツコツ積み重なって35号を迎えた。関係者の努力に感謝したい。今はなきビデオ・アーティスト、ナムジュン・パイクが以前、僕にこう言ってくれたことを思い出す。「メディアを持ちなさい。メディアを持っているというのは大切なことなんだよ。筑紫さんもあの番組を持っているからやっていられるんだから。」個人だけではなく組織にも当てはまる言葉だろう。長く続く小さなメディアを持つことは、学環・学府にとってとても大切なことなんだと思う。（水越伸）

第13回 制作展 開催

12月2日からの6日間、東京大学第13回制作展が開催された。東京大学制作展は、情報学環・学際情報学府の授業の一環として、学生主体で企画・運営するメディアアートの展覧会である。日々の研究で培った技術をアート表現に変え、より多くの方に東京大学の研究に触れていただくことを目的としている。

今回のコンセプトは「Re: 」。電子メールで馴染み深い「Re: 」には返信という意味があり、そこにメディアアートの醍醐味である、作品との対話性を重視したいという思いを込めた。期間中、本郷キャンパス工学部2号館フォラム(中庭)と展示室には、15点の作品が展示された。来場者数は800人を超え、来場者が実際に作品に触れ、作品を制作した学生との対話を楽しむ様子が見受けられた。運営学生側としても、来場者との対話の中で、自らの作品や研究を普段と異なる視点から見ることができ、様々な刺激や充実感を得ることができた。（佐倉研M1・郷田千晶）

上段左：うしろのしょうめん
上段右：風で育つファーニチャー

中段左：HAKOJIMA
中段右：Cyclone Display II bits, energy, rotation and recognition

下段左：JUKE Cylinder
下段中：Fabsence
下段右：ムービックキューブ

学環学府 35 02. 2012

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

編集委員 ： 水越 伸・林 香里・前波奈保子・浜田忠久 mail : news@iii.u-tokyo.ac.jp http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/